三人ぽっち

小林 晶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三人ぽっち

【Ｎコード】
Ｎ３１０２Ｅ

【作者名】
小林　晶子

【あらすじ】
わたしが小学二年生のころ、両親が死んだ。だけど、ピアノがあるから寂しくはなかった。

プロローグ

わたしが小学二年生のころ、両親が死んだ。

駆け落ちして一緒になった両親には親戚などなく、三人ぼっちの家族はあっという間に一人ぼっちになった。

お葬式の後、祖父だという人が来て「行きたいところを選べ」と言った。後になって、その人も選択肢の一つだったことを知ったけど、その頃は他にどこも、他の誰も知らなかったわたしの行き先は先生のところ以外になかった。自発的に選んだというよりは、わたしにほかの答えなど用意されていなかった。

先生は、わたしが三歳のころからわたしのピアノの先生だった。

先生はわたしに言った。

「私は君の親になるつもりはないよ」

「わかってる」

たとえ誰に育てられても、わたしの両親はわたしのパパとママ以外に戸籍上あり得ないし、元よりわたしは先生にそんなこと望んでなかった。

わたしにとって、必要なのは「家」であって、「家族」ではなかったから。

一

「よく弾くねぇ」
学校にもろくに行かないでピアノばかり弾いているわたしに、いつもそれだけ言った。
怒ることもしない。学校からかかってくる電話には何て答えているのか知らないけれど、最近はもう午後になっても電話は鳴らなくなった。
勉強なんてできなくても困らない。この家から出ることなんて殆どないのだから、分数の計算ができなくたって、漢字が書けなくたって不便じゃない。先生も、そんなことは教えてくれなかった。
そんな放任主義の先生は、大人から子どもまで大勢の生徒を持っているから帰りが遅い。
それでも、どんなに夜中でも待っているわたしに、先生は「コンビニで何か買えよ」とぼやきながらご飯を作ってくれた。
お世辞にも上手いとは言えない。
「まずいね」
「うっさい」
「味じゃなくて、味もだけど、この料理ごともらってくれる人、見つけなきゃまずいよ」
先生は火の点いてない煙草を咥えて、自分の手をしげしげと見つめた。
「この指はピアニスト仕様なのさ」
先生は三十が近いというのに独身で、わたしを見てはよくこうぼやいた。
「コブ付きかぁ…」
そんなとき、わたしは決まってピアノを弾く。
かの有名な『結婚の曲』は、自分で勝手に音符を減らして弾きや

すくしたものだ。いつになることやら分からないが、いつかは訪れるであろう、誰かさんの結婚式のために。
「ワーグナーとでも結婚しろっての？馬鹿にして。私だってねぇ…」

それからしばらくして先生は結婚した。
同じピアノ教室で、やっぱりピアノを教えている若い人で、わたしもよく知っている「いいひと」だったから余計、お邪魔虫になるのが嫌で。
その日のうちに家出をした。
四時間後、公園でお巡りさんに見つけられたわたしを迎えに来たのは、白い礼服姿のままの「いいひと」だった。三百メートルの道を手を繋いで帰りながら「先生で良かったの？」と訊くと、彼は笑って答えた。
「良かったかどうかは、後にならないと分かんないよ」
よく意味が分からなかった。
それは、わたしが子どもだからなのかもしれないけど、わたしが学校に行ってないからなのかもしれなかった。
「あの人、年増だよ」
「聞かなかったことにしてあげるよ」
家に帰ると、ジャージ姿の先生がソファでテレビを見ていた。わたしたちを見て「おかえり」と「おやすみ」を続けて言うと、大きな欠伸をしながら寝室に入っていった。
「…見る目ないんじゃない」
温めたシチューは相変わらずの味で、にんじんがかたいし、じゃがいもはほとんど形がなかった。
「視力は悪いんだ」
苦笑いを返されて、「ご愁傷さま」の代わりに「ごちそうさま」を言うと、わたしたちは川の字で眠った。

二

舗装されてない道を、私は先生の旦那さんに手を引かれて歩いていた。そこはいろんな乗り物を乗り継いで着いた、小さな村で、こんなところに来たのは初めてだった。ここで旦那さんは育ったのだと言う。

私がしきりに辺りを見回していると、随分後ろから「疲れた疲れた」と言いながらのろのろ歩いてくる先生が見えた。それからずっと前の方に大きな家が見えた。玄関の前に黒い猫が座っていたが、私達を見るとツイとどこかへ行ってしまった。しばらくして、追いついてきた先生の肩にちょこんと座っているのを先生が投げて寄越すと、猫は変な声で泣いて逃げていった。

「嫌われてんなー」

自分の動物虐待を棚に上げて、先生が言った。

その家は、旦那さんのお父さんとお兄さんと妹さんと、お兄さんの奥さんと男の子が一人、住んでいた。先生の親はもういないので、私がおじいさんと呼べるのは旦那さんのお父さんだけらしい。おじいさんという人を見るのは初めてではなかったような気がしたけれど、随分前のことで思い出せなかった。

家にはピアノがなかったので、私は仕方なく男の子に連れられてあっちこっち歩いて回った。

「あれなに？」

「あ？ああ、案山子か。都会の子供は案山子も見たことないんか」

その言い方があんまり意外そうだったから、私は思わず「本で読んだことはある」と言い訳した。本なんか読まないけど。

「暑そう」

「そっか？もう秋だぞ、涼しいもんさ」

涼しいとは思えなかったけれど、暑いのが嫌だとは思わなかった。彼は「きっと空気がキレイだからだ」と言った。

私はてっきり山登りでもするのだろうと気が重かったが、彼が連れて行ったのは不自然に削られた山の赤肌にある洞窟だった。入り口は狭くて中は暗くて、昼間なのにそこだけがひんやりしていた。
「防空壕だよ。知らないか？」
「知らない」
「学校で習うだろーが」
「知らない。行かない」
彼は「ふーん」とだけ言うと、ずんずん先に進んで行った。
「東京にだって昔はあったさ」
中には何の為か木の枝が積んであって、他には何もなかった。奥は思ったより深くて、私は男の子の後ろを躓いたり額を打ったりしながら一生懸命ついて行ったのに。
「夏はここがいちばん涼しいんだ」
彼はそれだけ言って、湿っぽい地面にごろりと寝転がって眠ってしまった。仕方ないので隣に座って起きるのを待っていた私も、いつの間にか眠ってしまっていた。

奥さんが夕飯の支度をしているのを見学していた私は、すごいものと目が合ってしまった。それは銀色でザラザラしていて、目玉がぎょろっと私を睨んでいた。奥さんが包丁で勢いよく顔と体を切り離すと、形の歪んだ頭が口を大きく開ける。私は怪奇な超音波を想像して、声にならない悲鳴を上げると先生の背後に逃げ込んだ。
「何だ、魚が怖いか」
その言葉に私は絶句した。今まで自分はこんなものを食べていたのかと思った。私はそのときまで、下ろしていない魚を見たことがなかったのだ。
「まさか魚が切り身で泳いでるとか言うんじゃないだろうね、この子は」
先生はひとしきり笑って、「甘やかしすぎたかね」と言った。いつのことを甘やかしたと言うつもりなのか分からなかったけれど、

確かに私は無知だった。ピアノのこと以外は何も知らなかったし、興味も湧かなかった。

それから、居間でおじいさんの膝に陣取っている黒猫を見つけた。よく見ると手と足の先が白かった。ピアノみたいだと思った。縁側でゴロゴロ欠伸をしているところと愛想がないところは、先生に似ていた。

夕飯の間、私は一度も刺身に箸をつけなかった。食べたら、あの目に呪われるような気がした。

三

先生は運動があんまり得意じゃなかった。

「どこ投げてんの」

子供用のグローブをつけた先生は、跳び上がりながら叫んだ。高めのボールが伸ばした腕を抜いて草むらを転がる。私は立ち上がってそれを拾った。

「もーやめた。はい、返す」

ボールを渡そうとした手にグローブを押しつけると、さっきまで私が座っていた場所にどかっと腰を下ろした。自分がやりたいと言ったくせに、まだ五分も経ってない。

よくあることだ。先生はピアノ以外のことに関して恐ろしく無関心で、時折興味を示すものにも冷めやすい人だった。サッカーボールを買ってきてもワールドカップが終わればただのインテリアになっていたし、バレーボールもバスケットボールも同じだった。腹話術用に買った猫の人形などは、もはや抱き枕以外の何者でもない。

旦那さんとキャッチボールを始めた私を見ながら、先生はそこらへんにある雑草や花を手当たり次第に引き千切って、何かを作り始めた。

「おーおー、誰に似たんだかねぇ」

左に逸れたボールを器用に拾うと、先生は足をバタつかせて喜んだ。私はちゃんと聞こえるように「おかげさまで」と呟くと、思いっきり返球した。

「いい球投げるね。俺に似たのかな」

「親バカー」

「おうよ、将来は大リーガーだな」

バカにしてる、と思う。

私は歳の割に背が低い。だからバレーもバスケもいまいちだった。今だって高いボールは取れない。唯一、得意と言えるのはサッカー

くらいで、私がリフティング出来るようになったのを見て先生が「高いゴールもネットもない」と嫌味を言ったものだった。
拾い損ねたボールを追う私を笑う。ムカッとして気を取られた私は何もないところで転んでしまった。反転した視界に、慌てて駆け寄って来る旦那さんと、その後ろからのらりくらり近づいてくる先生が映る。
「やっぱ君に似たんだ」
「そうきたか」
そこに座ったままの私の頭に、先生は雑草と花で編んだ花冠をバサと置いた。

私が先生の家に来た日、先生は自分のピアノの隣に新しいピアノを並べた。両親が火事で死んだとき、猫もピアノもみんな一緒に焼けてしまったからだ。焼けなかったのは私だけだった。
「音楽に進むなら、買ってやる」
そう言って白いグランドピアノを指差したが、私は前に持っていたのと同じアプライトピアノを選んだのだった。

「『花の歌』かぁ…、ちょっと早くない？」
私にとって二度目の、三人ぽっちの生活は何もなく四年の月日が経っていた。相変わらず先生は料理が下手で、旦那さんは味音痴で、私はピアノばかり弾いていた。
「そりゃあね、やって出来ないことはないだろうけど」
私は自分の手をまじまじと見た。私の手は先生とも旦那さんとも似ない、細い指の小さい手だ。頑張っても、オクターブに届くか届かないかだった。
「ダメならいい」
「弾きたいってんだから弾かせりゃいいじゃない」

鏡の前で、申し訳程度の化粧をしながら先生が言う。前は化粧品なんて持ってもなかったのに、「三十過ぎたら人様に失礼」とか何とか言って、本人でさえ使い方が分からないようなものまでたんまり買い込んできたのだ。

「気合いで弾け、気合いで」

「…分かった」

先生の言った通り、それはすぐに弾けるようになった。

「おっ、ちゃんと弾けてんじゃん」

先生は、本棚があるのに不精して、ピアノの上に楽譜や楽典を積みながら、ひょいと私の手元を覗き込んだ。

「ピアノの上に物置かないで」

「指、伸ばして弾くなっつっただろーが」

ぴしゃりと手の甲を叩かれて、私は反っていた指を直した。先生は椅子に座ってダラダラしながら「指使いが違う」とか「音が汚い」と言っていた。

「『花の歌』っていうより『野草の歌』って感じだねぇ」

どうせ花と野草の区別もつかないくせに、と思う。

私にとって先生はピアノの先生だったけれど、私はときどき先生が本当はピアノがあんまり好きじゃないんじゃないかと思うときがあった。

何で先生はピアノの先生になったんだろうと思ったけど、訊かなかった。

四

私が中学に入学する歳になると、何とかという私立の中学から学校案内がきた。学校にもろくに行っていない私にどうしてこんなものが来たのだろうと思って旦那さんに訊くと、そこは音大附属の音楽科があるのだそうだ。

旦那さんは、ピアノしか興味のない私が通うにはもってこいの学校だと言った。

「でも高校で決めたって遅くないよ」

「そんなことないさ」

すっかり寝ていると思っていた先生が、ぼさぼさの髪を束ねもしないでソファに転がっていた。

「ピアニストになるつもりなら、遅くないんじゃない」

「ならないよ」

私は即答した。

「じゃ、やめとけば」

先生はあんまり興味がなさそうなので、私は「分かった」と言ってそれを捨てた。

「何だ。学校、行くのか」

中学校の入学式の日、先生は私が新しい制服を着ているのを見て言った。

「来なくていいよ」

「そうかい」

訊いているんだかいないんだか判らない口調で、先生はいつもより五分だけ長く化粧をしていた。

私が来なくていいと言ったので、父兄席に先生の姿はなかった。

式が終わってから、私は何人かに声を掛けられた。それで、よく

分からないうちに教室まで連れて行かれて、気が付くと指定された席に座っていた。
先生は気まぐれな人だったけれど、一度も「ああしろ」「こうしろ」とは言わなかった。そんなとき私はいつもピアノを弾いた。そこに答えはないけれど、私が能動的にできるのはこれだけだった。
私がぼんやりと同級生の自己紹介を聞いていると、俄かに廊下が騒がしくなって、担任が慌てて私を廊下に引っ張りだした。そして何かをごちゃごちゃ言っていたが、要約すると、先生が学校の近くで事故に遭ったらしいということだった。

ほぼ同時に病院に着いた私と旦那さんが、先生の病室にノックもしないで入っていくと、ベッドに横になって先生が「来たか」と言って私達を頭から足の先まで眺めた。
「何だ、見舞いのメロンも無しかい」
気が利かない、と文句を言いながら起き上がる。
「見舞いどころじゃないよ。心配するだろ、なぁ」
「指は？」
「開口一番がそれかい」
先生は私の前に掌を突き出すと、握ったり開いたりして見せた。
「掠り傷。一応、検査入院だって」
でも次の日、先生は帰って来なかった。その次の日もそのまた次の日も、帰って来なかった。一週間くらいして、ピンピンして帰って来た先生は「医者が藪でさぁ」とぼやいていた。
先生はピアノの先生なのに、あんまりピアノを弾かない人だった。それが、急に私に連弾の楽譜を渡して弾くと言い始めた。
「ショパンなら『別れの曲』の方が好き」
「嫌。明るい方がいいじゃんか」
「分かった。本当は不治の病なのね？」
私が訊くと、先生は呵々と笑って答えた。

「阿呆か。だったらこんなとこにいないで、病院で大人しく延命治療してるだろーが」
「そう」
そんなふうには見えない。先生は死ぬ時まで死ぬことなんか誰にも気付かせないで、笑いながらフイと居なくなってしまうような気がした。そういう人だと思う。
「人間なんて、いつぽっくり逝ってもおかしくないだろ」
「ふうん。先生、どうして先生になったの」
「突拍子もない子だね、あんたは」
先生は、珍しく不意を突かれたという顔をした。
「そんなの、他に何にも出来ないからに決まってんじゃない」
確かに先生は運動嫌いだし、勉強もあんまり教えてくれないところを見ると得意ではないらしい。でも、だからというのは理由として弱い、と思う。
「ピアニストになりたかったの？」
「あー、私には向かんよ。別に先のこと考えてたわけじゃないし、いつお迎えが来てもいいようにって、やりたいようにやってたらこうなった」
「ふーん、行き当たりばったり」
「喧しか子ねー」
「私も、ピアノしか出来ないから」
そう言うと、先生は「そーゆーことはまともに弾けるようになってから言え」と、私を小突いた。
「ピアノしかやらない奴の言うことじゃないね」
出来るんだったらとっくにやってる、と言い返したかったが、先生は一人でさっさと弾き始めてしまったので、それ以上は会話にならなかった。それに、出来ないからやらないというのは弱い、とも思った。

先のことなんか分からない。
（でも、もし先生が居なくなってしまったら？）
答えは私自身が身を以って経験している。また、一人ぼっちになる。それだけのことだ。そうじゃなくて。
（もし先生が居なくなってしまったら、私はどうすればいい？）
やっぱりピアノを弾くだろうか。それともやめて…やめて何をすればいいんだろう。
（私にとってのピアノって、何？）
鍵盤を叩けば応えてくれる、楽器。だけど、そこからは何の答えも返って来ない。ただ、私が望んだ通り、音を拾ってくれるだけ。
（どうするのがいちばん良いんだろう？）
答えは、まだない。
私の中には黒くてぐるぐるしている、よく分からない気持ちがあって、それはパパとママが風邪をひいた私を残して出掛けてしまった、あの日の気持ちに似ていた。

五

私が中学二年生の年、先生が倒れた。ようやくまともに弾けるようになった、先生曰く「全然、華麗じゃない『華麗なる大円舞曲』」をコンクールで連弾し終わったときだった。舞台裏で私の頭をポンと叩いたあと、先生の糸はぷつりと切れた。

病院で目を覚ました先生は、けろっとして言った。

「肝臓癌だって」

「治るの？」

「だったらとっくに治してるっつーの」

旦那さんが先生に何か言おうとしたとき、看護婦さんが来て、お医者さんと話をしに行ってしまった。

「癌って痛い？」

「痛そうに見えるのか」

先生は元気だった。私は疎いから分からないだけなのかもしれなかったが、少なくとも私が想像していた病人のイメージとは違った。

それでも、先生はもうすぐ居なくなってしまうんだなぁということだけは、はっきりと分かった。

「本当はピアノ、あんまり好きじゃないんじゃないか」

急にそんなことを訊かれたので、私は面食らって絶句した。私が？

「別にそれが悪いって言ってんじゃないよ。あんたが逃げてんのをとやかく言うつもりはないし」

「逃げる？」

「いつも、弾かなきゃって思いながら弾いてる」

「…。先生は、先生になって良かった？」

「そうさねー。でなきゃ、あんたともあの人とも会わなかっただろーねぇ」

先生はそう言って目を瞑った。

「喋り過ぎた。疲れたからちょっと寝かして」
そこにいるのは、ソファでゴロゴロしている、いつもの先生だった。大きな欠伸をして、すぐに寝息が聞こえてきた。あんまり情けなくて、涙も出なかった。
それからしばらくして、先生は死んだ。

お葬式が終わった日、私は家出した。
どうするのがいちばん良かったのか、分からない。こんなときはいつもピアノを弾いた。でも今は、それで気持ちが紛れるとは思わなかった。
ただ、何もかもが上手くいくってことはないんだなぁと、ぼんやり考えていた。人が死ぬということは悲しいことだと思った。いや、知っていた。知っていたけど忘れていた。忘れていられたということが、ずっと私が求めていた答え。
あの日、私と先生はあのコンクールで何とかという賞をもらったが、私にはそれが意味のあるものには思えなかった。
（ピアノを弾くことを、評価されたかったわけじゃなかった）
先生が言った通り、私は嫌なことから逃げて忘れようとしていたのかもしれない。ピアノが好きだから弾いているんじゃなかったのかもしれない。でもきっと、本当に嫌いだったらピアノに逃げたりはしないと思った。
公園に私を迎えに来たのは、黒い礼服姿の旦那さんだった。
「あいつ、君がピアノやめられないのは自分のせいなんじゃないかって思ってたんだと思うよ」
先生の傍にいるために、音楽が必要だった？…そんなことはない。例えば私が音楽やらなくなっても、きっと先生は先生のままだった。
だけど、私が音楽やらない子供だったら、きっと先生とは会わなかっただろう。
「言葉が足りないんだな、基本的に」

「先生にはピアノがあったから」
そして私は、たくさんの言葉の代わりに、たくさんの音楽を貰った。両親を失ったけれど、家族を貰った。
悲しいことを忘れていられたのは、先生が大切なものをたくさんくれたからだ。これからは私が、忘れなくても生きられるように。
「自分の好きなようにすればいい。僕達だってそうしてきたんだから」
「今は、弾きたいときに弾ければいい」
忘れていた。いつだって誰に強制されたわけでもなくて、私が弾きたいと思ったから。
「そういうとこばっかり似てるねぇ」
暗くなった道を帰りながら、私が「先生で良かった？」と訊くと、彼は笑って「当然」と答えた。
「コブ付きでもいいの？」
「何で？」
「…先生がいなくなってさびしくない？」
好きだった先生ではなく、先生のおまけだった私だけが残って。
「さぁ。でも僕はきっとそんなこと思わないと思うよ。だって僕が今まで楽しかったことは、きみもいてはじめて楽しかったことになるんだから」
先生がいて、旦那さんがいて、…私がいて？　あの家は、楽しいことがたくさんあった。
「僕たちは三人でひとつの家族だったけど、二人でもちゃんと家族でいられるよ」
私は黙って頷いた。
もしかしたらこの先、二人で寂しいって思うときがあるかもしれない。「でも一人ぼっちでいるよりは、ずっといい」。それは、私が最初に先生のところへ来て思ったことだった。でも、同じでも今は同じ気持ちじゃない。
大切な人が死ぬ。それは一人ぼっちで乗り越えるにはとても苦し

いことだから、私には家族が、…この人が必要なんだ。
自然と、涙が流れた。
「餞別にショパンでも弾いてやるか」
「『別れの曲』？」
「まあ、それはどっちでもいいんじゃない。どうせ寝てばっかりで聞いちゃいないだろうし」
彼はそう言って、天を仰いだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3102e/

三人ぽっち

2010年10月8日15時42分発行